

序

われわれの考古学研究室研究紀要も、今日ここに第3号を刊行する運びとなった。

今回も、前号に引き続き、研究室諸氏の熱意によって多くの論文を収めることができたことを心から喜ぶとともに今年東大構内遺跡の発掘に忙しいなか原稿を送って頂いた方々に感謝したい。

さて、考古学は遺跡・遺物に基づく学問であるが、これは、考古学が資料の形態・材質等の分析にのみ限定された学問であるということではない。V. G. チャイルドも、このことについて、“できるかぎりその行動を復原しそこに示された思考を再現することが、考古学者の仕事となる”（近藤義郎訳『考古学の方法』）と言っている。そのためには、資料の分析とともに総合も行わなければならない。

現在、考古学資料の急激な増加に伴って、技術論、集団論、葬制論等々が盛んになってきているのも、考古学の総合化の流れである。分析から出発し、総合し、その成果をまた分析にフィードバックさせる研究は、具体的な発掘調査にあっても極めて必要である。しかしながら、考古学研究における、分析・総合という二つの面は、常に調和のとれたものでなくてはならない。そこで、このような研究の展開に当たって不可欠のものが、研究者の広い視野である。

研究者が広い視野をもつことによって考古学が飛躍的に発展した例として浜田耕作博士の業績がある。浜田博士はいうまでもなく、日本で初めて京都大学に開かれた考古学講座の初代主任教授であるが、浜田博士がロンドン留学中に、F. ピートリ教授の薫陶を受け、帰国後、大正十一年に著した『通論考古学』は、その後の日本の考古学に深い影響を与えた。東大考古学研究室の初代主任教授原田淑人博士もヨーロッパ留学中ピートリ教授の教えを受けたが、原田博士も次の主任教授駒井和愛博士も考古学に志す者の必読書としてこの『通論考古学』を薦めたのであった。

われわれは、この書に示された広い視野と、その後の日本の考古学の発展をみる時、このような立場の重要性を強く感じるのである。

われわれの研究室で、いろいろの分野の研究者が相寄り、衆知を集めて、研鑽に励む目的の一つは、このような広い視野を養うということである。

そのような趣旨のもとにこの紀要をまとめた。既に刊行された第1号、2号については、先輩をはじめ多くの学界の方々から御好評と激励を頂いた。一同心を引き締め、今後も研究に勤しんでいきたい。

なお最後になったが、本紀要の英文要約の校訂に当たって金子エリカ氏のお世話になったことを記して感謝の意を表したい。また編集に当たった今村啓爾助手、原稿を整理した山科恵子氏の労を多としたい。

東京大学文学部考古学研究室

上野佳也